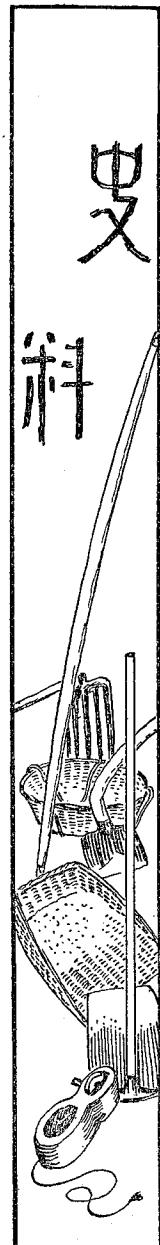


# 東 海 道 行 脚 [十]

田 中 好



で夫れを引續いてやつてゐる、だから渡船の不便も茲二三年で除かれ、船にのるのも馬鹿、乗らぬも馬鹿と言はれた  
湖上の危険も無くなるのも近い内だ、之で新居宿も更生するであらう。

徳川幕府が無二の要害と頼んだ濱名湖の今切には、西の方新居から盛に橋が架けられてゐる。もつと早く架けられた筈だつたが、濱口内閣の緊縮政策とやらに祟られて一度工事を中止した、其のお蔭で東海道を旅する人は天正年間に開けた姫街道——本坂街道の厄介になつて豊橋に出るのぢやが、架橋を見合したことが議會で隨分問題に爲つたの

新居宿、其の起源は色々に言はれてゐる、前にも物語つた  
やうに此處、舞坂新居の間は天變地異の災禍に見舞はれて  
變つたからだ、續日本後記は、天長十年、遠江國濱名郡猪  
鼻驛家、廢來稍久、今依國司言、遣使檢其利害、更令興復。

と言つてゐるから延喜式の出る前に既に驛があつたことは確かだが、此處新居が延喜式の猪鼻驛であるかは問題ぢや、風土記には、應永十二年、文明七年、明應八年、永正七年等、有急波、湖水變爲潮海、蓋當此時、猪鼻驛水沒、古道廢、而新以三箇日爲驛家乎、俗以新井宿日猪鼻者非也と言つてはゐる、成る程、水没したと言はれてゐる夫れ以前の寛仁の更級日記では濱名の橋を渡つて、それよりかみは、井の鼻といふ坂の、えもいはず佗しきをのほりぬれば三河國の高師濱といふ。と言つてゐるから猪鼻を通つたことは明かだが、水没したと言ふ以前即ち建久六年七月には猪鼻驛は橋本驛と命名され東鑑は、賴朝歸東の時、於遠江國橋下驛、當國在廳並守護沙汰人等、予參集、國務及檢斷等就清濁、聊有令尋成敗給事と傳えてゐるから水没したと言はれる、應永の頃には猪鼻驛は無かつた筈だ、詰り風土記は、三箇日を越えた姫街道が東海道の交通に供されたことに依つて、此處新居——新井は昔の猪鼻驛ではないと言ふのであらうが、私は夫れを捨てゝ新居——新井は矢張り延喜

式の猪鼻驛で夫れが、橋下——橋本と爲つて新居に爲つたものと見て、今の新居町字濱名の部落が夫れぢやと言ふ說に賛成したい。

鎌倉や室町時代の旅人は、此處、濱名の邊で湖上の風月に遊興の氣を湧かしたり松の響波の音に心を傷めたものであつたが、徳川時代の旅人は夫れだけでは済まなかつた、夫れと言ふのは徳川氏が此處新居に關所を設けたからだ、風土記は、慶長五年秋、今切爲關所、置與力十騎同心四十八人、爲番兵、元祿八年、移成於新井町、移關於藤十郎山、移町家於其山麓。と傳えてゐる、關所を設けた慶長五年は關ヶ原の戦があつた歳だから、此處に關所を設けて通行の取締を嚴重にしたものぢや。

寛文七年五月に定められた定は十四箇條もあつて夫れを見ると、往還する者は番所の前で笠や頭巾をぬがねばならぬ、乗物で通る者は乗物の戸を抜き通さねばならぬ、殊に女は番兵の差圖で女に見せた上で通すと言つた調子の嚴重さであつた、だから之に泣かされた旅人は何人あつたか數

知れないであらう、今でも天和の時代に旅した井上通女の嘆きを想ひ出さずには居られない。

荒井にやどかりて、難波にて賜りし御印、關所に奉りしに、わきあけたる少女と書きわくべき事を、

えしらで、たゞ女とのみ書きて奉り、扱御印のことばにも、女とのみありければ、ゆるし給はで、空しくものやどりに歸りぬ、いかに

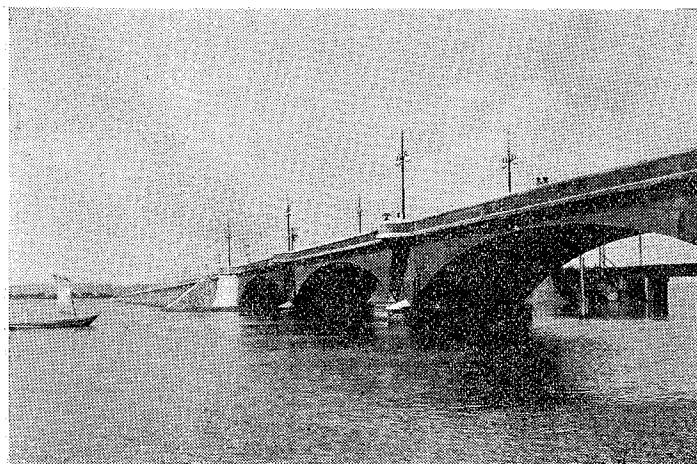
悲しつらくて、いかでさる事しらさりけんと、我身さへ恨しくて。

たびごろもあら井の闌をこえかねて袖による浪身をうらみつゝ。

と泣くく手札を書き換えた爲に

大阪まで急使を立てゝゐる、痛まし

いことだ、是だから關所破りの違反者も出來れば、抜け道を通る脱法者



も殖えて來るのは人情の自然ぢやが、併し此處新居の關所と相並んで天和五年姫街道には氣賀の關所を設けたので、

東路への旅は容易ではなかつた。彌

次喜多の連中でも、サア／＼御關所前でござる、笠をとつてひさをなほさつしやりませ、ソレ／＼舟が當りますぞ、と笠や頭巾をとつて禮儀を正して通つてゐる、今から思へば馬鹿らしいことだ。

關所の址は今の新居町役場のある新所だ、安政二年に建てかえられた古い建物を今は役場の用に使つてゐる夫れを傳える爲に標札が建つて旅人の足を留めさせてゐる。

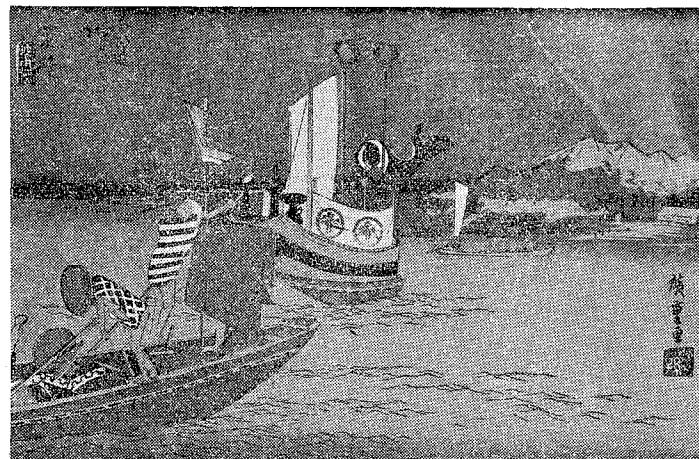
○

今的新居町は戸數千六百街並は亂雜してゐるが、漁夫と商家で活氣の

ある町だ、濱名橋の取附き附近は既に四間の路幅があるが、町内の改良は六ヶ敷やうだ、橋が出来たら矢張り昔の橋本宿のあつた濱名の部落に附けるより外ないだらう。

町を出ると昔の東海道の面影を偲ばすやうな街道だ、幅は三間から四間を數えてゐるが松並木の勢で古びたさを感じさす、道中の元町と言ふ部落には四五寸角の石柱に昔の一里塚の所在を表はしてゐる、こゝ静岡縣は誰が發案したものか知らないが舊蹟を探る人の爲に到るところに熊々標柱を挿して旅の案内をしてゐるのが、私の旅には何となく嬉しい。

波浪雲天俱一色 東南溟海更無山。  
聖門有術人何敢 潮見坂頭停馬看。



林道春が丙辰紀行に詠んだ潮見坂矢張り歸家日記が、汐見坂をこゆるに、とほつあふみの海原はるべと見わたさる景色いと面白し。と言つたやうに景色の可い處ちや、併し道春や通女の通つた潮見坂は道幅は三間に足らないもので勾配も十分もある。

新居慶應四年七月 明治天皇江戸御行幸の詔を下し給ひ、明治元年十月一日

鹵簿蕭々として此處潮見坂を御通過らせられた、其のとき天皇始めて大洋を御覽になつて、海外御統制の御志を起されたとか言はれてゐる。

木戸孝允の御隨行日記は、十月朔日晴西風甚(中略)今日、輦輿元白須賀へ被爲至始メテ、至尊大洋ヲ、觀覽被爲遊暫時御途中ニ、輦輿ヲ被爲止候從是、

皇威ノ洋外ニ相輝シ始メナリト感泣ニ不堪也。と傳えてゐる。

御野立所は潮見坂の中途にある、

見下せば青海浪々白雲沈々と言つた

風景だ、併し道路は悪い、で大正四年に舊道の南の方に移して改修され

て居るが矢張り屈曲が多いので、自動車交通の爲には危険な箇所が多い

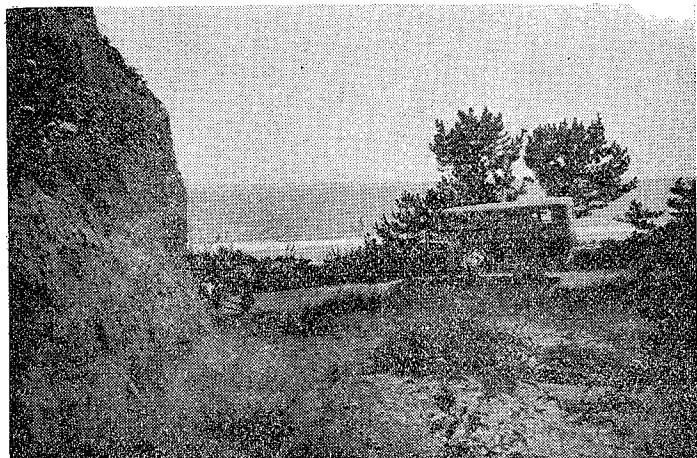
矢張り昔の街道に路線を採つて改良する方が適當ぢや、今人の計畫を貶すのでは無いが、道路を舗えるには昔からの自然路を無下に捨てゝはならぬ。

### 今　　の　　白　須　賀

徳川幕府は此處に傳馬所を設け旅客運輸の仕事を司らしめ、町の中心に本陣があつて旅籠屋も隨分澤山に經營され、町民の多くは馬界人足等に爲つて随分殷盛を極めたものであつたが、明治七年頃から白須賀の北方にある新所村から濱名湖を通つて濱松に出る汽船交通が始まつて、此處白須賀の西部から東に旅する人は其汽船を利用するやうに爲つたが爲に

町人の言ふやうに潮見坂が明治大業の基礎を生ましめたものとすり

### 白　須　賀



衰微し始めたが、明治二十一年に鐵道が敷かれても白須賀へは寄つて呉れないと言つた調子で、益衰へるばかりだ、今も戸數七百五十と言はれてゐるが、見窄らしい町だ、町の中央にも大きな坂路があつても、之さへ改良されない運命に置かれてある矢張り歸家日記が、天和の昔に物語つたやうに、白須賀といふあたりを過ぐればなほ山路なり。と言つた時代と餘り變りは無いやうぢや。

土人に言はすと、延喜式時代に猪

鼻驛と言はれたのは、此處白須賀のことぢやと、其の譯を聞くと、新居

は郷で驛家ではない、夫れは正倉院

文書に天平十二年濱名郡輸租帳に新居郷と記され、和名抄にも中之郷と言はれ、遠江國風土記傳には中之郷の中ぢや



昔の白須賀

と言はれてゐるから、今の新居町は古の新居郷或は中之郷であつて橋本は猪鼻驛の附屬地であつた、そして夫れは東海道に方つてゐなかつたと言ふのだ詰り鎌倉時代以前の東海道の路線が何處を通つてゐたかと言ふことに依つて議論が岐れるのだが、白須賀が猪鼻驛であつたと言ふ證據を持たないで、白須賀が濱名湖の西北岸にある鷺津に通ふ道の分岐點にあたつてゐるとか、新居が郷であつたと言ふことだけで、私の前に言つた説を變へるだけの確心が起らないから、土人にはお氣の毒だが、私の族は是位にして進むことにする。

境に、高師の山と聞ゆるあり、山中に越えかゝる程に、谷川の流れ落ちて岩瀬の波ことごとく聞ゆ、境川とぞいふ。と言つたのが因で、夫れから以後の

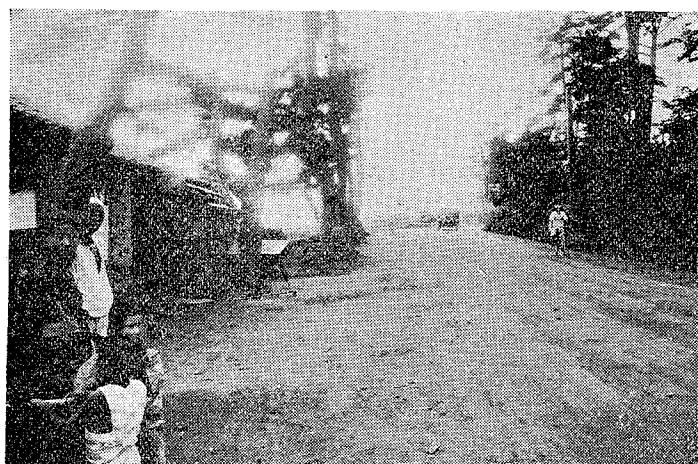
旅日記は、こゝ境川のことを書かなければ旅行記が成り立たないものと思つたものらしい。

遠州へつき合せたる橋なれば

にかはの國といふべがりける

彌次喜多さんまでが洒落れてゐる

が、川と言へば言ふものゝ幅二間にも足らない位の用水路ぢや、林道春溝あり、是なん遠江三河の境なりといふ。と傳えたのは眞實だ、庚子道の記が、境川とて細きながれのある土橋ひとつかけたり。と言つた土橋は境川橋と命名され東の方の橋柱



川

今

行旅の爲に設ける一里塚の代りに自然の山に松を植えたと言はれてゐる一里山、今はあれか是かと探らなければ判らないが、境川を渡つた右の山が夫れと言はれてゐる。街道は明治の時代に手入されたものか幅が四間もあつて私等の自動車を何の難作もなく通して呉れる併し二川に入る手前には、道路の旅に嫌いな省線鐵道との踏切がある、夫れに御町寧にも踏切番人の小屋までが附いてゐて態と見透しを妨げてゐるのは、そもそも鐵道萬能時代の祟りだ。早く改めなけりや双方の不利益であらう。

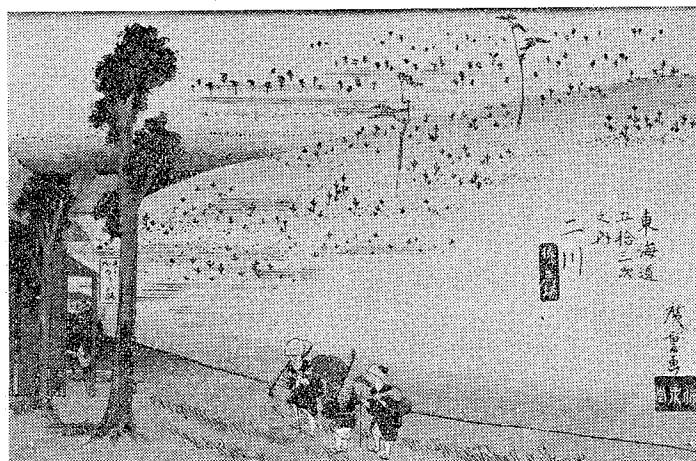
には静岡縣、西の方の夫れには愛知縣と記されて靜岡愛知の兩縣で管理されてゐるもの、昔を語る兒戯のやうにも感する。

## 二 川

玉くしけけふ二川のあけゆけば

是も三河の内とこそきけ。

春曙記行に詠まれてゐる街だ、遠州の國境が濱名湖の自然物を突破して三河の方へ進入してゐるのだから、此歌のあるのも無理は無い、今は戸數千七百と言はれ大都市豊橋と同じやうな景氣を表はしてはゐるが、昔かららの旅人は餘り此處二川のことを物語つてはゐない、詰り豊橋の一部と見られる地位にあるからだ大都市制度が可いものなら早く二川を豊橋に編入してやることだ。



鹿狩、凡列卒五六十人、以弓銃驅之  
又唐犬六七十疋、縦横追之、大御所  
相具鐵砲之上手數十輩、令擊之給猪  
二三十獲之、給時大雨降來、故令止  
御狩、給今晚御着濱松云々。と言つ  
てゐるから慶長時代の宿驛では無か  
つたことは明かだ、天和年代に旅し  
た坂家日記の主人公でさえ、畫のほ  
二 どしばし休む所、二川といふ。と言  
つて休息したゞけのところだ、寶永  
年代の旅日記、驛路の鈴では二川驛  
と言つて、白須賀より二里六町。と  
言つてゐるから天和寶永の間に宿驛  
として發達したものであらう。

此處、二川のことは餘り史上に傳えられてゐない、駿府政事錄には、慶長十七年二月小於三遠國堺川二川山、有御

線道路だ、街を出ると昔から言ひ囁かれた火打坂、享和年代からの古道で今も三間路の兩側に風雅な松並木が残され

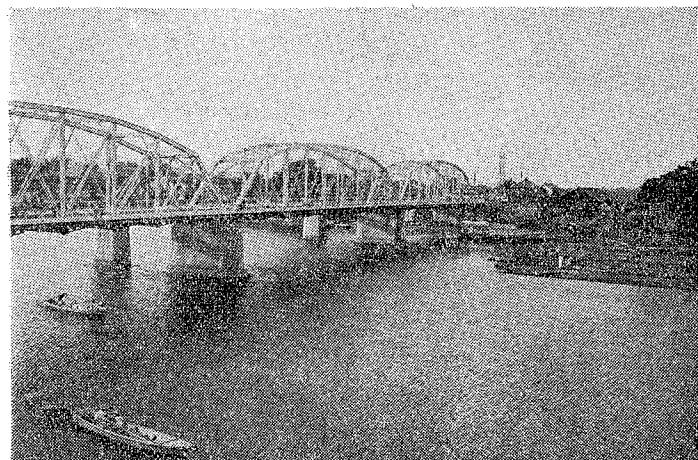
てゐて、昔を物語つてゐるやうぢや、何でも明治十一年明治大帝が御通輩遊ばれたとき、左の新道に附替えたと言はれてゐる、お蔭で今は旅する人も其の餘澤に恵まれてゐる。

行がけの駄賃に拜む觀音も

尻くらひとは岩穴の内

彌次喜多の連中が冷かした岩屋觀音、今は高い岩の上に獨り東向きに立つてゐる觀音さん、彌次喜多が岩穴の内と言つたのは、嘘だ。

此處から先きの街道は、昔の松並木を左右に残して、其の間を出來得る限り擴げたものだ、で五間幅の近代道路に爲つてゐる、東海道の改良と史蹟の保存とは、どうも衝突する觀念のやうぢやが、此様式で改良さえすりや雜作はない、夫れに近代都



## 今

### 豊橋

豊橋、今は市と爲つて附近郷村の經濟を支配してゐるが、明治二年に豊橋と改名するまでは吉田と言はれた徳川時代の一宿驛に過ぎなかつた、此處東海道は豊川が水の出る度にいつも變つて旅路も亦其のお蔭で變へられたものだ。萬葉集に、妹母我母一有加母三河有二見自道別不勝鶴。水河乃二見之自道別者吾務毛第

市計畫家とやら言ふ連中は、由緒ある東海道を捨て、豊橋二川の道を新らたに拵えやうと計畫してゐる、物好きですかのなら格別、交通の爲の道路なら之で澤山だ、百年の計としてまだ幅が狭いと言ふのなら松並木の外側に歩道や緩速車道を造れば十分だらう

事獨可毛將去。と言つてゐるから此

處東海道は二た道あつたらしい。

延喜式には參河國驛馬。渡津。と

ある渡津驛、今は其の地名はない  
が、豊川の右岸下地町南清須から對

岸の西豊田に架けられた府縣道の橋  
を渡津橋と言つてゐるが、橋が架け  
られない以前は渡津の渡があつた、

延喜式時代の東海道は此渡津の渡か  
ら今の中呂吉田村の中呂に出てゐた  
ものらしい、夫れに延喜式の以前、  
承和二年六月廿九日、太政官符に參

河國飽海矢作兩河各四艘。と達しが  
あつて、飽海——今の豊川の渡船が  
從來二艘であつたものを更に二艘殖

やされてゐる、こうなると平安朝時代の東海道は二筋あつ  
たやうだが、夫れは矢張り豊川の流水に禍されて何れかに

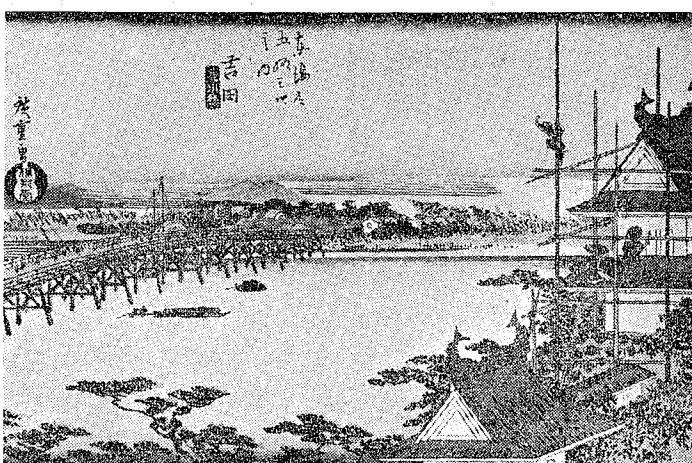
變更されたのだらう。

鎌倉時代に爲ると又夫れが變つた  
海道記は、赤坂の宿を出て、「かくて

本野が原を過ぐれば、懶かりし藤は  
春の心を生替りて秋の色疎けれど  
も、分行く駒は鹿の毛に見ゆ、時に  
日重山にかくれて月星闇に顯はれ  
ぬ、曉をはやめて豊川の宿にとまり

ぬ。」と言つて八幡村本野の附近を通  
つて本坂街道を豊川町に出たものだ

東關記行の旅も、矢張り此處、本野  
ヶ原に出て「本野が原にうち出でた  
れば、四方の望み幽にして山な岡く  
なし、秦甸の一千餘里を見わたした  
らむ心地して草土共に蒼茫たり、月



昔の豊橋

の前司、道の便りの輩に仰せて植え置かれたる柳も、まだ陰と頼むまではなけれども、かつてまづ道のしるへとなるもあはれなり。」と言つて當時の街道の有様を物語つて尚附け加えて「或者のいふを聞けば、此道をば、昔よりよくるかた無かりし程に、近頃より、俄に渡津の今道といふ方に旅人多くかゝる間、今は其の宿は、人の家居をさへ外にのみ移す、などいふなる、舊きを捨てゝ新しきに就く習ひ、定まれることゝは言ひながら如何なる故ならむと覺束なし」と言つて東海道渡津の宿が廢れたことを物語つてゐるが、又建治年間の旅、十六夜日記は、「日は入り果てて猶物のあやめも分からぬほどに渡津とかやいふ所にどゞまりぬ」と言つて渡津の街道を通つてゐる、だから此處の本街道は、平安朝時代は、今の豊橋の西方、渡津の渡から牟呂を通つたが、夫のが豊橋の北にあつた飽海を通ることに爲り、夫のが亦鎌倉時代の始めに上流の豊川本坂街道附近に替えられ、末期に至つて飽海を通る道に復活したのぢや、夫れを徳川氏が吉田として五十三驛に定めたもので今の變

橋が盛に爲つたのも矢張り其のお蔭だ。  
昔の吉田、今の豊橋は、戸數一萬六千と言はれ、商賣も可なり盛なやうぢやが、重要物産は米と生絲とが最大の生産額を示してゐると聞いては市勢の有様を想像することが出來得やう、併し麻真田だけは特產品と見てやつて可いものだ、此市勢だから市内の國道は徳川時代からのものを受け繼いでゐるだけで、近代道路としては札木町の一部だけが鋪装されてゐる位だ、軍縮で兵營を他に移されたなら市としての生活は困難であらう。

## ○

町を出ると直ぐ豊川だ、今までこそ豊川に橋は架けられてゐるが、往古から元龜元年までは矢張り渡船だつたのぢや、家康が吉田の城を完全に占領し臣酒井忠次を城主にしたので、酒井城主は城を修築するやら市街の整理などをして、豊川に橋を架けたのが始りだ、其のとき橋を架けたところは今のところとは違つて、鬱屋のところから対岸の下地に土橋を架けた、酒井に代つて城主と爲つたのは池田輝政で

あつたが、是も亦城廓の擴張をやつて其の序に豊川橋を船町のところに移して板橋に改めた、坂家日記の主人公が、吉田の市店を過ぎて、いと長き橋に至る、只今わたらはし、漸く古くなれりとて、作りかへらるゝなり、大きなる木ども引きかけ、けづりまろばして、たくみどもをはじめ人多くつどいて、とよみあへり、いま渡る橋にも人々集りて是を見る。と言つて渡つてゐるのも城主が、戦國時代群雄割據のときでありますながら太つ腹で架橋したお蔭で、徳川氏の防備策に比較して其の効を賞めてもよからう。

今の橋は其處から四十間ばかり下流に架けた、何でも明治十二年三月の架橋ぢや想で、自動車交通には差支ないやうに爲つてゐる。橋を渡れば下地の町、今は豊橋と同じやうに發展して人爲的な行政區劃を無視してゐるやうだ、併し街道は豊橋と同じやうに狭くるしい。町を出て小坂井村のところでは豊川鐵道と東海道とが平面で交叉してゐる、併し新らたに出來た愛電に其の線を併用さしたさうで二つの踏切を避け得たことは、矢張り大正の路政が目醒めたこと

とを物語る證據であろう。

天下に名を博してゐる豊川稻荷、參拜の心は起らないが見ておきたい心は山々だが、私の旅する東海道は鎌倉時代の夫れに這入る餘裕がないので街道から敬意を表して西へと急ぐ、いやな鐵道踏切を無事に切抜けると街道の兩側には人家が櫓を連ねてゐる、此處ばかりは堂々と言つても可いやうな街道、國道とは言ふものゝ田舎道としては珍らしい程の六間幅の道だ、何でも昔からあつた松並木を切り倒し並木敷を取り入れて街道を擴張したと言ふことだ、街は擴げたい併し並木があると言つた場所では此手で道を擴げるのが當世の流行ぢやとも言はれてゐるが、少しは史實の保存も考へて貰はなければならぬ。

國府町に出る手前で又々愛電と東海道との平面交叉ぢや、此處の交叉は急が入り過ぎて踏切の爲に舊東海道を附替えながら新國道で平面交叉してゐる、舊街道の交叉は斜に爲るので新街道を持てて直角に交叉する爲だと言はれてゐる。併し同じ附替するのなら思ひ切つて高低交叉にすれ

ば可いものに將來を考えない暴舉ぢやと、舊街道の並木にとまつた鳥が阿呆々々と笑つてゐる。

増基廬主記に、三河國國府にとまる、このをりしのをかに、人々止まりて、きたなさいふべきにもあらず、柏の木の下に幕ひきて宿り待つて人知れず思ふことおぼう侍るに、と言はしめた國府町、町中の街道は三間から四間の幅

を持つてはゐるが汚い町だ、追分けに行くと旅する私の待つてゐた本坂街道の分歧點ぢや、矢張り昔から囲されたけに東海道に敗けない街狀を保つてゐる。松並木だつて立派なもので府縣道としては上々の格だ、古いときからの蔭られた功績に敬意を表して私の旅を急ぐであらう。